

にも
包括

精神障害の有無や程度にかかわらず、誰もが安心して自分らしく暮らすことができるよう、包括的なシステムを構築していく取り組み

発行：相模原市精神保健福祉課

にも通信は3か月に1度の配信となっており、6月、9月、12月、3月と編集作業に取りかかるたびに季節の移り変わりを感じます。加えて3月は卒業シーズンでもありますので、旅立ちの寂しさを感じる一方で、新たな一步を踏み出す就職、転職シーズンでもあります。今回は、にも包括協議の場で取り上げたテーマ「みんなで考える にも包括を支える人材の確保と育成」の様子を記事にしたいと思います。

みんなで考える にも包括を支える人材の確保と育成

グループワークの前に・・・

国では、精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築に係る検討会(R2.12.17 第6回)において、「求められる人材のイメージ」を以下の3層に整理しています。

- ① 人材育成のシステムづくりができる人（都道府県）
- ② 保健・医療・福祉等の連携が図れる人（圏域）
- ③ 現場で連携しながら個別支援を実施できる人（市町村）

今回のグループワークでは、上記②及び③に焦点を当てて情報共有と意見交換を行い、①への検討に繋げていくことを目的に実施しました。

また、検討会資料によれば「支援体制構築は片手間に取り組みめるものではなく、**人材確保が必要。人材の確保と育成が急務**である」とし、その理由として、「高齢者の地域包括ケアシステムや、自殺対策、生活困窮者自立支援、子育て支援等、市町村が取り組んでいる施策の中には**精神保健の視点が重要な取り組み**は多い。（中略）これらの相談業務にあたる職員の基本的なスキルとして、**相談者がメンタルヘルスの課題を抱えている可能性がある場合の対応のしかた等、基本的なメンタルヘルス支援の研修を推奨**することも考えられるのではないかとしていることから、人材の確保と併せて人材の育成についても参加者で話すことを目的としました。

人材不足… 人員不足… 関心が…ない?!

当日は29名（25機関）が参加し、医療機関、訪問看護、相談支援事業所、ピア・家族、行政などA～Fの6グループに分けて実施しました。前半は現状の共有を行い、後半では対応や対策について検討しました。医療機関や訪問看護のグループからは、「精神科病院に閉鎖的なイメージがあるのか、求人を出しても人が集まらない」「応募があってもマッチングが難しい」など求人に関する話題が出るとともに、業務多忙による恒常的な人員不足についても意見が交わされ、「うちもそうです」「あるあるですね」など同じ悩みを抱える声が聞かれました。行政のグループでは、毎年の採用はあるものの、離職率や休職率の多さが挙がり、特に経験年数の浅い職員にその傾向が強いことが共有されました。この日の協議の場には実習生も参加しており、オープンキャンパスをしても福祉に関心がないのか人が集まらないことや、そもそも福祉職を希望する学生が減っていることなどを

知り、関係者はショックを受ける場面もありました。



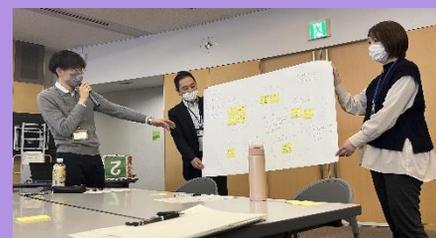
組織内外での関係づくり

それぞれの現状や課題が一通り共有された後は、そうした現状を少しでも良くしていくためには、という視点で意見を出し合いました。人材確保のためにできること、確保した人材、今いる人材の定着や育成についてどうするか、が後半のテーマです。

人材の確保については、それぞれの仕事や役割について、どのように魅力を伝えていくかという意見が出ました。医療機関Gからは「医師やコメディカルのチーム力が強み」であることをPRしていくこと、相談支援Gからは人材確保の財源的観点から「報酬の見直しや加算にを求める」といった意見が特徴的でした。



サイコロを振り、次の発表者を決めるキーステイヤさん



人材育成では、「研修や勉強会などは多くの職員が参加しやすい時間帯で開催するなどの工夫」や「一人の訪問でも安心できるチェックリストの作成」に加え、「ゆるく話せる場所の存在」や「いつでも相談できるような環境・ネットワーク作り」といった、組織内外での関係づくりを求める声が共通して聞かれました。

“福祉”をもっと身近に

ピアサポーターと地域包括ケア推進課（事務職）、実習生のグループでは支援者主体のグループとは異なる視点での意見が出されました。福祉を希望する学生が少なかったり、関心を持ちにくいことの一因として、「困った時にしか使わないのが“福祉”というイメージが強い。小さい時から福祉に触れられる機会があると良いのでは。福祉が身近にあることが望ましく、例えば、教育機関や保育園などの施設に当事者が訪問し、交流を図るなどはどうか。どうしても他人事になりがちなので、当事者意識を持てるような取組があると良いと思う」と発表しました。

オブザーバーとして講評した熊谷参事からも「小さい頃から福祉について知る機会を作り、“福祉”を特別と思わないようするというアイデアは大変興味深かった」とコメントをいただきました。さらに「今回出た協議の場でのアイデアが相模原市の政策のタネとなる。実現には数年かかるが、お互いが助け合っていくような仕組み作りができるとうい。今後も支援者同士がお互いを理解していく努力が大切である」と締めくくり、閉会となりました。

【続報】地域移行支援ピアサポーターによる病院訪問

にも通信15号でも報告した地域移行支援ピアサポーターによる病院訪問。

訪問先である相模湖病院さんからの参加者、病院職員の皆さんからもご好評をいただき、2回、3回と回を重ねることができました!!

“患者さんの声を聴きに行く”という想いから始まった病院訪問。

さまざまな趣向を凝らした場面設定にも注目していただければと思います。

報〇ステーションがやってきた?!?!

1回目の病院訪問を終えた帰りの車中での反省会。「もう少し話しやすい雰囲気づくりができたよかった」というピアからの声がありました。初対面ということもあり、そうすぐに打ち解けることは難しいものです。でも何らかの場面設定ができないかと考え、ある報道番組を模した設定をし、インタビュー形式にしてはどうかと閃いたのです。急いで工作し、配役を考え、病院さんも協力してくださいました。



そして臨んだ第2回病院訪問。当日はメンバーの入れ替わりもあり、「言葉に詰まったらどうしよう」と各々がやや緊張した面持ちながら番組?!を進めていきます。

2名のピアサポーターがそれぞれのリカバリーストーリー

を発表し、それについて参加者が質問をしていくという設定です。参加者からは「夜眠れないこともあり、そういう時にどうしているか聞きたい」「貯金もないし、車もない。もらっているのは障害年金だけ。生活保護を受けることはできるか」などの質問がありました。参加者からは「役立つことも聞いて良かった。自分なりにできることを頑張りたい」「自分のことを話せる場に出られてよかった」といった感想が聞かれ、病院職員からも「難しい質問にも共感的な対応してもらえてよかった」「病棟だと話せない内容もあったと思うので、こうした声を退院に向けて役立てたい」といった感想をもらうことができました。ピアも「入院中の悩みなどを話してくれたので、外部から来た自分たちが受け入れられている感じがした」「退院したいという意欲が伝わってきた」「参加してよかった、と言ってもらえて『無駄じゃない』と思えた」と手応えを感じていました。

編集後記

協議の場ではその時々トピックスをテーマに情報共有や意見を出し合いながら、にも包括体制の構築を進めています。今回のテーマである人材の確保と育成では、同じ機関や職種ごとにグループ分けをしたこともあり、「顔の見える」から「腹の中まで見せ」てしまうような、いつもより濃厚なやりとりが見られ、参加者の満足度も高かったのではないのでしょうか。次のフェーズに進む兆しが見えたようにも感じられました。

ピアサポーターによる病院訪問では、みなさん(ピアサポーター、入院者、病院職員)が、“笑顔になった”こと、“楽しめた”こと、“また会いたい”と思えたことが大きなおみやげになりました。また、当事者との協働は、福祉の世界や考えを素敵な虹色にchangeできる、良き経験となりました。次は何をしようか…みなさんと“ともに”創っていききたいと思えます。ご協力ありがとうございました。(精神保健福祉課 窪田)

ごき〇んようが復活?!?!

1回目、2回目より3回目…ということで人の欲は尽きません。またまた某番組をオマージュさせていただきました。そうです、サイコロを転がして、出た目のテーマで話をするというアレです。今回はみんなが一つになれるように音楽要素も組み入れ、

“何がでるかな 何が出るかな♪”と手拍子のご協力をお願いしました。皆さん意外と楽しんで手拍子をしてくださりとても和やかな雰囲気では進みました。

トークテーマは右記のとおり。

序盤は同じサイコロの目しか出ず、毎回「好きな芸能人は??」になるハプニングもありましたが、良いアイスブレイクになりました。



🎲 トークテーマ 🎲

- ・退院したら何したい?
- ・困っていることは?
- ・これからやりたいことは?
- ・改善されるとよいことは?
- ・好きな芸能人は?

“言葉の重み”

最初は出た目のテーマについて話す、といったものですが、次第にエピソードトークから質問に流れていく展開が見られました。ある参加者からは病気の症状について質問がありました。その質問に対し、ピアサポーターから「統合失調症もうつ病も似たような症状がある。病名によってははっきり分けることは難しい。治るということに期待するよりは、どう付き合うかが大事。服薬や睡眠、よく休むことが基本ですね」と答えるやりとりがあり、深く頷く参加者。また「私は、手足が不自由で、何をしても上手く動きません。リハビリしても良くなりません。どうしたらいいですか?」というお悩みもありました。



すぐに応えるにはなかなか悩ましい雰囲気の中、あるピアサポーターが発した言葉は「希望をもつこと、あきらめないことです」。「そうですね、ありがとうございます」。この言葉は、誰が言うかがとても大切なように感じました。自分たちと同じ経験をしているピア

サポーター(当事者)だからこそこの“言葉の重み”を感じる一幕でした。楽しい時間はあっという間で、最後に感想をいただきました。「十人が十人それぞれの人生がある。自分の病気は一生治らないと言われているが、少しでも良い方向にもっていきたいと思っている。これからの人生をプラスにしていきたい。」「皆さんの話を聞いて自分も頑張らなきゃと思った。ここでの時間を無駄にしたくない。」など前向きな感想が多く聞かれました。ピアサポーターも「皆さんの体験を聴くことができ、自分自身勉強になりました」「至らない点も多くあったと思うが、皆さんに会えてよかったです」と充実した表情で相模湖病院を後にしました。病院職員からも「回を重ねることで形になってきたかなと手応えを感じています。普段病室にいる人が外に出るきっかけにもなると思うし、ピアサポーターの見えない力も感じました。続けていけると良いですね」と感想をいただきました。次年度以降もこのご縁と繋がり、そして可能性を期待して取り組んでいきたいと思えます。



にも包括は支援機関の皆さまや地域の人たちとともに創り上げていくものです。

事務局では、地域で取り組んでいる活動や耳より情報、好事例などを広く募集しています。

電話でもメールでも構いません。ご意見・ご感想も含めてお待ちしております!!

<精神保健福祉課> ☎ 042-769-9813 ✉ seishinhoken@city.sagamihara.kanagawa.jp

